「家族は家族，愛は愛」
――日本におけるセックスレス現象と婚外関係について，ドイツ語圏との比較から（2010-2019）――

アリス・パッハー
（横山　陸 訳）

“Family is Family, Love is Love”: Sexlessness and Extramarital Affairs in Japan Compared to German Speaking Countries（2010-2019）

Alice Pacher
Translated by Riku Yokoyama

目　　次

はじめに
1. 導　　入
2. 日本におけるセックスレス現象
2.1　セックスレスの定義
2.2　性的欲求の消失の要因
2.3　カップル関係における性意識の変化
3. 日本における婚外関係
3.1　婚外関係におけるセクシュアリティ
4. インタビューの分析から
5. ドイツ語圏におけるカップル関係
5.1　パートナー関係におけるセクシュアリティ
5.2　婚外関係

はじめに

本稿は，日本とドイツ語圏を例にして，愛とセクシュアリティに関する２つの主要なテーマについて論じる．とはいえ，それは非常に大きなテーマを扱うこととなるので，本稿は二部構成となる．本稿の第１の部分で問題となるのは，日本のパートナー関係[1]における愛とセクシュアリティである．本稿は，まず，今日のパートナー関係におけるセックスレスに関する社会学の議論を一瞥する．（日本でセックスレスとして記述されるのは，性的欲求の消失，性的禁欲，性的無活動（sexuelle Inaktivität）[2]，あるいはまた性的消極性である．）続いて，本稿は，婚外関係あるいは不倫（Fremdgehen）[3]（不倫や婚外恋愛）と呼ばれる関係について，それが現代日本社会においてどのように論じられているのか，その特徴を紹介する．そして，このセックスレスと不倫という２つの社会的流行（トレンド）を，著者が行ったインタビュー調査の結果に基づいて再構成する．

〔本稿の第２の部分では〕このセックスレスと不倫という２つのテーマについて，ドイツ語圏の現状と比較する．それによって，私たちはセクシュアリティとは決して「自然なもの」ではなく，むしろ文化や社会に強い影響を受けて「構築されるもの」であることが，よりよく理解できるだろう．

以上の本稿の要点は，（性的な）パートナー関係における親密性であり，それに関して本稿が主張したいのは，現代日本社会において性的欲求はパートナー関係の内部ではなく，むしろこの関係の外部において経験されるというテーゼである．もちろん，ドイツ語圏においても婚外関係という

ものは存在するが，現代日本社会と比べると，パートナー関係における性的満足がより高い価値をもつと考えられている．

1. 導　　入

「セックスなんていりません．私たちは日本人なんです（No Sex please, we'are Japanese）」．これは，人々の驚きと困惑とともに全世界を駆けめぐった有名な見出し（ヘッドライン）である．2013年，イギリスの報道局BBCが日本人のセックスレスに関するドキュメンタリーを放送すると，多くの新聞が同じタイトルで，こうした日本の現象を報じた．それ以来，西欧諸国において，日本のセクシュアリティは注目を浴びている．ドイツ語圏の新聞も，「疲れ切った日本人」（Stern 2017），「島国における性的欲求の消失」（Zukunft mit Kinder 2019），「セックスレスの日本」（Asienspiegel 2010），性的欲求のない「草食系男子・女子」（Presse 2011），「日本の無性欲が経済を脅かす」（iDAF 2013）について報じている．

図1 「セックスなんていりません．私たちは日本人なんです」

図2 ドキュメンタリーシリーズ「セックス＆ラブ」（Christiane Amanpour）

報道局だけでなく，ネットフリックスでも日本のセックスレス現象は主題化されている．小説『夫のちんぽが入らない』はネットフリックスによってドラマ化された．ドラマの主人公はある女性であり，彼女は夫と付き合った当初から，つねに性交渉に苦痛を感じていた．彼女はセックスの場面になると夫の性器がまったく入らない状態となり，そのためセックスレスのパートナー関係となってしまったことが描写される．だが，物語の最後で二人は結婚し，強い情緒的な結びつきをもつことになる．日本の女性たちの多くが，この物語のなかに自分自身を発見した．しかし面白いことに，このドラマに対するヨーロッパ人の反応は，日本における反応とはまったく異なる．日本ではこの小説がベストセラーとなったが，ドイツ語圏での

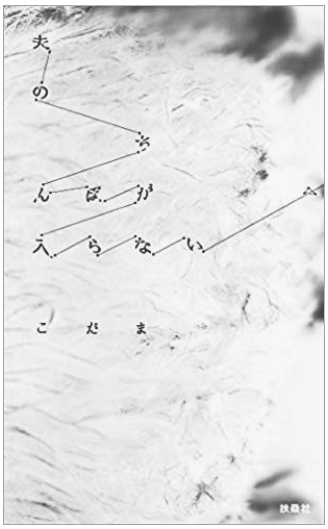


図3 『夫のちんぽが入らない』（2017）

図4 ネットフリックス・ドラマ「夫のちんぽが入らない」（英語版）

反応は，不思議なものに対する驚きというものであった．

そこで本稿が問いたいのは，なぜ西欧文化は日本のセクシュアリティ，とりわけセックスレスを問題視するのか，ということである．ドイツ語圏にも，セックスレスに似たような傾向があるのだろうか．この問いには，本稿の最後で答えることにしよう．

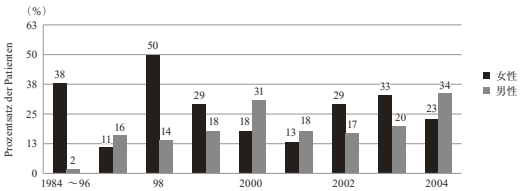
2. 日本におけるセックスレス現象

まず本稿が問うのは，「セックスレス」と呼ばれる性的無活動（sexuelle Inaktivität[4)]）が日本においてどのように主題化されているのか，という点である．そのさいには，セックスレスや性的欲求の消失が，学問領域において，とりわけ社会学の領域においてそれほど一般的なテーマではないことに留意しておく必要があるだろう．それらは性医療のテーマに属するものだと見なされているが，とはいえ，性医療においてもこうしたセックスレスというテーマは，まだそれほど注目されているわけではない．また，社会学においてはセックスレスだけでなく，そもそも「セクシュアリティ」というテーマがあまり注目されていない．しかし，それはなぜなのだろうか．それは，セクシュアリティというテーマが依然として生物学的なものだと見なされているからだろうか．あるいは，セクシュアリティというテーマが依然として非常に強くタブー視されているからだろうか．あるいは，セクシュアリティは〔学問の対象ではなく，私たちの〕日常に関わるものだと思われているからだろうか．残念ながら，本稿はこれらの問いに答えるものではなく，それに答えるためには，本稿の外でさらなる議論が必要だろう．

2.1 セックスレスの定義

日本で「セックスレス」と呼ばれる性的不活動の定義は，精神科医の阿部輝夫に由来する．阿部によれば，1980年以降，性欲低下（リビドー）や性的嫌悪の男性患者が彼のクリニックを訪れることが増えてきたという．阿部がこうした現象を問題として認識したのは1991年のことであり，1994年に日本性科学会のジャーナルに以下のようなセックスレスの定義を発表している．

> 「特殊な事情が認められないにもかかわらず，カップルの合意した性交あるいはセクシュアル・コンタクトが一ヶ月以上なく，その後も長期にわたることが予想される場合，セックスレス・カップルのカテゴリーに入る」（阿部：2004）．

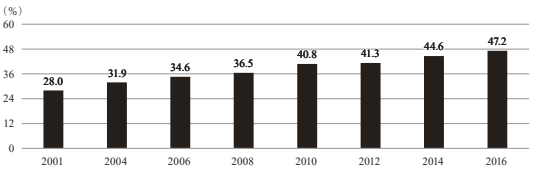


（出所）阿部（2004）40

図5　阿部による性的嫌悪を抱える患者の割合

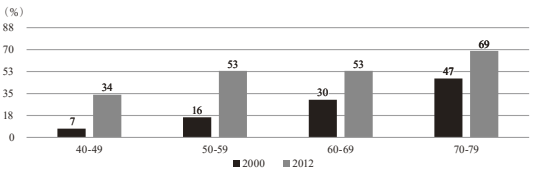
なお，性的欲求の消失は身体的な原因によってもしばしば生じるが，この定義には情緒的ないし／または心的な原因のみが含まれる．また，定義におけるセクシュアル・コンタクトには，キス，抱擁，抱きしめるといった行為も含まれる．

阿部がセックスレス現象を問題化した後，この言葉は世間でも知られるようになり，自分がパートナーとセックスレスの関係にあることを認める人々も増えてきた（図6，7，8を参照）．



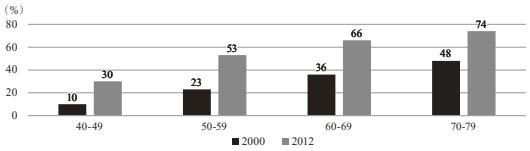
（出所）日本家族計画協会（2017）

図6　婚姻関係における性欲消失の割合



（出所）荒木（2014）9

図7　セックスレス状態にある既婚男性の割合



（出所）荒木（2014）9

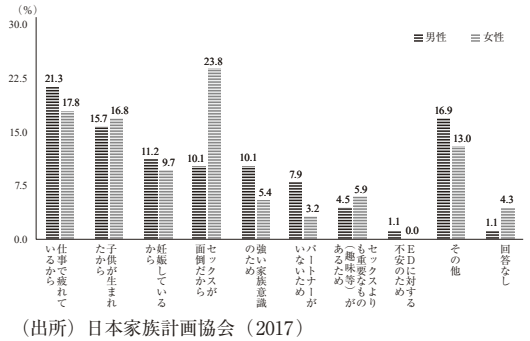
図 8　セックスレス状態にある既婚女性の割合

2. 2　性的欲求の消失の要因

セックスレスの原因はさまざまであるが，それが議論されるときには，たいてい同一の諸要因が問題となる（図 9 を参照）．とりわけ (1) 仕事による疲労，(2) セックスは面倒という考え，(3) 出産後の無性欲（「出産後なんとなく」の状態）が，セックスレスの主な原因と見なされている．また，セックスレス現象が学問的に研究されることはまれだが，それを文化と関連づける議論は存在する．その場合，（子どもが両親の間で寝る，川の字とも呼ばれる）日本の睡眠文化が，セックスレスの多くのケースと関連づけられている（Moriki 2017）．

それに対して，平山（2019）の考えによれば，デジタル化した社会，とりわけ，たとえば成人向けビデオゲームなどによってエロティックな想像を楽しむことが無際限に可能となったことが，現実生活におけるセックスレスの大きな原因となっているという．

また，荒木（2014）は性生活の意識変化をセックスレス現象の増加の一因と見ている．



（出所）日本家族計画協会（2017）

図 9　性欲消失の諸要素（2014）

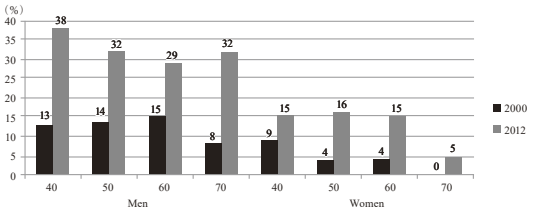
2. 3　カップル関係における性意識の変化 [5)]

荒木（2014）は日本性科学会（2014）とともに 40 歳から 70 歳までの男女の性意識に関する調査を行っている．そこから明らかとなったのは，カップルにおける性意識が近年，とくに 2000 年から 2012 年にかけて劇的に変化しているという事態であった．とりわけ，カップル関係における親密な結びつきを特徴づけるものであったセクシュアリティの価値が低下してしまったという．こうした調査結果を特徴づけるのは，次の 2 つの重要な傾向である．

1．（セクシュアルな）言語的および非言語的コミュニケーションの減少
2．婚外関係という傾向の増加

性意識の大きな変化のひとつは，コミュニケーションにおいて確認できる．2000 年から 2012 年のあいだ，日常におけるカップルのコミュニケーションがますます減少していったことが分かる．このことから推測されるのは，〔2000 年と比較して〕2012 年の時点では，パートナー双方がフルタイムで働くようになり，一緒に過ごす時間が以前よりも少なくなったということである．セクシュアルなコミュニケーションに関して言えば，パートナーに自らの性的願望を表現することが減ったか，あるいはまったく無くなるという傾向があった．非言語的コミュニケーションに関しては，どうだろうか．2012 年の研究では，パートナーとセックスレスの関係にあるという調査対象の女性の 88％と男性の 86％が，「ほとんどない」と答えている．この研究によれば，「肩を触る」，あるいは「マッサージをする」というのが，カップル関係における，もっとも多い身体接触の形態であった．

調査結果からは，もうひとつの重要な傾向も確認できる．それは，40 歳から 50 歳の男女において，カップル関係における性的活動を望んでいる人数も減少している，というものである．とりわけセックスレスのカップルは，パートナーとの性的結びつきをまったく望んでいない．それに対して，



（出所）日本性科学会・日本セクシャリティ研究会（2014）79

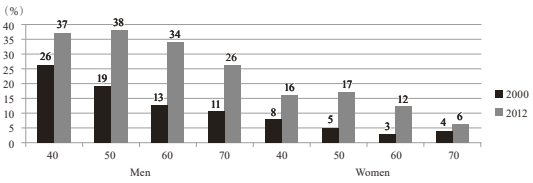
図 10　婚外関係をもつ男女の割合

パートナーとの情緒的な安心感や愛を望んでいる女性においては，性的活動への願望が 2000 年から 2012 年のあいだで増えている．調査結果からは，さらにもうひとつの興味深い流行（トレンド）変化が見られる．詳しくは次章で扱うことにするが，それは図 10 に見られるように，男性と，とくに 40 歳から 60 歳の女性において，婚外関係の数が増えている，というものである．

3. 日本における婚外関係

日本における婚外関係は不倫あるいは婚外恋愛とも呼ばれるが，それは自体は何ら新しい現象ではない．しかし，そこに新たな流行（トレンド）を見て取ることができ，それゆえに，この問題に注目することには大きな価値がある．この新たな流行とは，婚外関係の数だけでなく，不倫に対する意識が大きく変化している，という事態である．つまり，図 11 が示すように，不倫を許容する傾向の高まりである．もし不倫が自分の家族に悪い影響を及ぼさないのであれば，不倫は許容されると考える男女が増えているのだ．

現代日本社会では，不倫相手の選択にも変化が見られる．自分よりも若い未婚の女性と性的関係をもつ既婚男性については，すでに 2000 年以前



（出所）日本性科学会・日本セクシャリティ研究会（2014）79

図 11　家族に迷惑をかけなければ，不倫は許容できると考える男女の割合

から繰り返し報告されていた．しかし 2000 年以後に〔新たに〕報告されるようになったのは，不倫相手として同じ志向をもつ人間，つまり既婚者を求める男女が増えてきたということである．これは，根本的にはある種の平等を意味するのかもしれない．お互い既婚者であれば，お互いが相手に同じくらい期待すると同時に，同じくらい期待しないだろう．

現代日本社会では，婚外関係を表す言葉も，不倫から婚外恋愛という言葉へと置き換えられる．不倫と婚外恋愛はともに不倫を意味するが，不倫という言葉はネガティブな行為に用いられる．この言葉をよく目にしたり耳にしたりするのは，たとえば，有名なスター，とくに女性の有名人の不倫を報じる見出し（ヘッドライン）においてである．不倫という言葉は，否定的な響きをもっている．これとは反対に，婚外恋愛という言葉は何かポジティヴなものを連想させる．明らかに婚外恋愛としての不倫の言説（ディスクール）は，既婚のカップルの愛情関係や性的関係よりもロマンス化されており，それは図 12 から図 16 からも分かるだろう．

図 12 はノンフィクション小説の表紙である．この小説に出てくるのは，夫との不快な性生活に非常に苦しんでいる女性である．図 13 は，女性たちがセクシュアリティに関する問題について自由に語り合うという朝日新聞のプロジェクトが本になったものの表紙である．

このプロジェクトでは，専門家たちもこうした女性たちの声に耳を傾け，彼女たちの体験や考えについて意見交換している．これらの体験や考えは〔もともと〕新聞に掲載されている．このプロジェクトでも，愛情関係や性的関係の否定的な側面が繰り返し議論されている．さて，図 14 から図 16 はどうだろうか．これらは図 12 および 13 とは対照的に見える．図 14 から図 16 は，不倫に関するルポタージュのブック・カバーであるが，それらのタイトルは不倫の政治化を表している．それが強く打ち出されているのが，図 15（「恋が終わって家庭に帰るとき」）と図 16（「不倫の恋も，恋は恋」）である．図 17 は，上手く不倫するため

図 12 『夫の H がイヤだった.』

図 13 『オトナの保健室』

図 14 『妻と恋人』

図 15 『恋が終わって家庭に帰るとき』

図 16 『不倫の恋も恋は恋』

図 17 『不倫の作法』

の指南書である．しかし，不倫においてつねに性的行為が前景に立つ必要はない．たとえば，添い寝友やソフレと呼ばれるような，性的行為をまったく，あるいはほとんど伴わない関係もあるが，その場合，前景に出てくるのは情緒的な結びつきである（高橋 2019）．添い寝友は婚外恋愛においてだけでなく，固定された関係は望まないが，夕晩を過ごす仲間を求める若者たちにも見られる．

3.1 婚外関係におけるセクシュアリティ

ジャーナリストの亀山（2014）が行った男女の性生活に関するインタビューによれば，インタビューを受けた男女の大半が，配偶者との婚姻関係の内では〔もはや〕セックスがないものの，婚姻関係の外ではセックスの経験があり，それを「家族は家族だけど，愛は愛だ」と説明している．彼らにとって家族とは，いつでも仕事のあとに戻ることのできる安息の場所なのである．だが，ロマンチック・ラブあるいはセクシュアルな情熱とは，何か非日常的なものであり，それを彼らは婚姻関係の外で楽しんでいる．セクシュアルな領域において不倫とは，彼らにとってある種の自己実現なのである．

本稿の著者が行ったインタビューにおいても，

婚姻関係の内と外とでは，性生活が異なるシナリオで行われていることが明らかとなった．その一例として，性行為自体を取り上げて考えてみたい．長い結婚生活のなかで，性行為はますます短時間化し，簡素化していく．そして前戯はもはや興味をそそるものではなくなるが，それはパートナーの人柄もその身体（からだ）もすでによく知っているという思いがお互いに大きくなるからである．もはや前戯は，興奮を呼び起こすものと見なされないのである．著者がインタビューしたカップルの多くは，自分たちがセックスする理由を，「婚姻関係にあるので，セックスしなければならない」と，説明する．荒木（2014）によれば，パートナーとの関係が固定され，それが長くなると，（前戯を含めた）性行為の時間は平均して 30 分以下になるという．また，セックスの体位も 1 ～ 2 の最小限のものとなるという．

では，不倫における性行為はどうだろうか．そのさい注目すべきは，セクシュアルな特別性（sexuelle Exklusivität）である．不倫において性行為は興奮を呼び起こすもので，婚姻関係と比べると，前戯だけでなく性行為自体も長くなり，体位にも 2 つ以上のバリエーションが見られる．相手の人柄を知りたい，そして相手が何に興奮するのかを知りたいという好奇心が，ここでは非常に強いのである．したがって不倫においては，婚姻関係の場合とは違って，骨も折れば，お互いの身体（からだ）を愛撫する時間も長くなる．また，性的なレパートリーも増える．たとえば，婚姻関係においてはオーラル・セックス（クンニリングス）に否定的で，むしろ止めて欲しいと思っているが，不倫相手とはオーラル・セックス（クンニリングス）するとインタビューで語る女性たちもいる．

こうした簡単な例を考えるだけでも，次のような主張は〔真に受けず，〕批判的に捉えるべきだということが分かるだろう．そうした主張とは，現代の日本社会において性的に無活動な関係〔つまりセックスレスの関係〕が増えているのは，そもそも日本文化には，一般的に言って，人々の交際におけるスキンシップの習慣がほとんど，あるいはまったくないからだという主張である．むしろ，現代の日本社会に見られるのは，性的親密さや性的欲求を婚姻関係のなかに組み込むことの難しさであり，性的欲求の圏域と家族の圏域とのあいだに一線が引かれているという事態である．なぜ，セクシュアリティの体験は固定された婚姻関係の内ではこれほど難しいのに，婚姻関係の外では容易なのだろうか．なぜ，セクシュアリティに関する枠組みがこれほど差異化されるのだろうか．このことについて，本稿はさらに問いたい．

4. インタビューの分析から

以下では，著者が行ったインタビューのいくつかの事例を手がかりに，婚外関係と性的欲求の消失（セックスレス）というテーマについて，さらに考えていくことにしよう．

事例：夫婦間で生じる性的なプレッシャー（37 歳，既婚男性）

この事例のインタビューの回答者（インフォマート）は，自身の性的欲求の消失を説明するのに，彼にとってセックスの意味が親密さ（インティマシー）から生殖（リプロダクション）へと変化したことを挙げている．彼は自分と妻が子どもを欲しいと思うようになってから，もはや妻に性的な魅力を感じなくなったという．子どもを欲しいと思う以前は，定期的にセックスをしていたが，それはセックスが彼らにとってお互いに愛し合い，結ばれていること（親密さ）の象徴であったからだという．ところが，彼らが子どもを欲しいと思うようになってから，彼の妻は毎月，排卵日のときだけセックスを望むようになった．そして，彼はプレッシャーを感じるようになった．彼が長い一日の仕事から帰宅すると，妻は彼が帰って来るのを待ちわびていて，セックスを求めたという．こうした状況に彼はプレッシャーを感じていたが，それについて妻と話そうとせず，妻が望む通りにしていた．しかし，それはまったく楽しいことではなかったことを，彼はインタビューにおいて強調している．それは「純粋に出して，おしまいという行為」だったという．もはや，そこにお互いの親密さとコ

ミュニケーションはなかった．インタビューのあと，著者は彼の妻が無事に妊娠したことを知った．

そして最初のインタビューから半年後，著者は彼にもう一度インタビューを行った．彼は妻の妊娠を喜んでいたが，妻とはもうセックスをしたくないと語った．「彼女は子どもと家族のために，ただ母親であるべきなのでしょう．だけど，私は自分の家族のなかでセクシュアリティを楽しみたくないですね．」依然として，妻とのセックスを楽しむことができないことを彼は強調した．妻が誘ってきても，彼にはトラウマのような感情が湧いてきて，彼女とセックスしたいとは思わないという．しかし，それについて妻と話し合ったのか，そして性生活を改善しようとは思わないのかと著者が尋ねると，彼ははっきり「いいえ」と答えた．彼は毎日たくさん働き，仕事に自分のエネルギーを注ぎ込むので，あとはただ帰宅して，家ではもう何も考えたくないのだという．妻との性生活を改善するためには，あまりにも多くのエネルギーが必要であり，それならば，自分の家族の外でセクシュアリティを楽しんだ方が彼にとって良いのだろう．このことを，彼は次のように説明する．「誰だって，それぞれのシチュエーションに応じた友人をもっています．たとえば，釣りには，釣り好きの友人と一緒に行くでしょう．飲みには，飲むのが好きな友人と一緒に行くでしょう．どうして，セックスについても，そういうふうにできないのでしょうか．セックスは，セックスが好きな人とするんですよ」（M30.07）．

事例：妻だけ ED（28 歳，既婚男性）

別のインタビューの回答者（インフォマート）（M20.11）も似たような状況，つまり，妻が子どもを望むことで，彼自身がセックスへの欲求を消失するという状況を体験していた．彼はボタンひとつでセックスを強いられているようなプレッシャーを感じたという．それ以降，彼は妻だけ ED（妻に対してだけ勃起不全という状態）を患っている．興味深いことに，彼は多くの女性と婚外関係にあり，結婚前から続いている関係もあるという．一度会ったきりの女性もいれば，二，三度と繰り返し会った女性もいるという．また，ひとりの女性とは，4 年以上も定期的に会っているという．本稿の第 3 節で述べたことにも関連するが，彼が婚外関係を結びたいと思うのは，すでに既婚で自分と同じか少し年上の女性だけだという．

彼は妻との固定された婚姻関係の外で，セクシュアリティを楽しんでいるにもかかわらず，この状況に苦しんでいると語る．彼は妻との満足のいくセクシュアリティを絶対にもう一度取り戻したいと思っていたが，それは叶わなかった．著者のインタビューのあと，彼の妻は離婚を申し立てた．その理由はセックスレスの関係であった．パートナーとの関係が上手くいくためには，やはりパートナーとの性的な満足が重要である．このことを，彼はインタビューのあとで，はっきりと知ることになったのだ．

事例：夫が私を裏切ったあとで（43 歳，離婚女性）

次に，夫とセックスレスの関係にあった女性の回答者（インフォマート）の事例についても，手短に見てみることにしよう．彼女に第三子が生まれたあと，夫は彼女と一緒に寝ることを拒むようになった．だが，彼女にとって，セックスは承認と快感を意味するものだった．そこで，彼女は無くなってしまった性生活について夫と何度も話し合おうとしたが，夫はそれも拒んだという．じつは，夫が彼女を性的に拒むようになったのは，彼が他の女性と不倫したときからだった．この事実を知って，彼女は夫と別居することにした．そして彼女も，別の既婚男性と新たな関係を始めた．彼女はこの男性から愛されていることを感じるという．毎日お互いに電話し，しばしば一緒に旅行にも出かけるという．もし自分や相手の家族を壊さなければ，不倫は問題ないと彼女も主張する．

以上は著者が行ったインタビューの短い抜粋であるが，そこから明らかなことは，〔夫婦関係をはじめとする〕カップル関係のなかに性生活を組み込むことの難しさである．とりわけそれが難し

くなるのは，カップルのセクシュアリティが情緒的な親密性（インティマシー）から生殖（リプロダクション）へと還元される場合である．とくに興味深いのは，インタビューの回答者（インフォマート）たちが本当は性的関係を望んでいながら，さまざまな要因によって，そうした性的関係をカップル関係の内で実現できないという点である．こうしたインタビュー調査の結果は，本稿の第２節で言及した性医学者の阿部による統計とは異なる．阿部の説明によれば，統計におけるセックスレスの割合の高さは，性的嫌悪感の割合の上昇に起因するのであった．しかし重要なことは，たんに性的嫌悪感の上昇だけを調べるのではなく，そもそも，どのような要因によって性生活が困難となったのか〔そして嫌悪感を感じるに至ったのか〕を詳しく調べることである．

5. ドイツ語圏におけるカップル関係

次に本稿はドイツのカップル関係における愛とセクシュアリティについて概観してみたい．婚外関係に関する論考として本稿の執筆を依頼されて，率直に言えば，著者はそれを嬉しいと思うと同時に，それを難しいとも感じた．そうした困難さを感じたのは，なぜだろうか．上述のとおり，日本におけるセックスレスや婚外関係に関するレポタージュや統計資料はいくつも存在する．だが，ドイツ語圏に関して考えてみると，この２つの現象を扱った統計資料や研究がほとんど存在しないのである．しかし，それはなぜだろうか．

以下では，まずドイツ語圏のカップル関係において，セクシュアリティにはどのような価値があるのか，一瞥（いちべつ）することにしよう．そのうえで，ドイツ語圏においては，セックスレスと婚外関係がどのような意味をもつのか明らかにしたい．

5.1 パートナー関係におけるセクシュアリティ

ドイツ語圏において（さらに一般的に西洋諸国において），セクシュアリティはカップル関係において非常に高い価値をもつが，それは主にセクシュアリティの三つの重要なアスペクトによって特徴づけられる．

(1) 欲求としてのセクシュアリティ／（個人としての）性的な自己決定

ドイツ語圏においてセクシュアリティは，自分自身のアイデンティティの本質を構成する確固とした要素と見なされる．固定された関係において，セクシュアリティは親密性（インティマシー）の象徴であるだけでなく，それは非常に強く快感へと中心化されてもいる（Lewandowski 2010）．つまり，カップル関係において性的な快感を発見しそれを感じることが，この関係の中心にある．そして性的な快感を維持するためには，自分自身のセクシュアリティとパートナーのセクシュアリティとをよく知る必要がある．

著者が行ったインタビューにおいて，ドイツ語を母語とする回答者（インフォマート）（M06）は，セクシュアリティについて以下のように語っている．

> 要は，お互いにはっきりと，明白に理解しておくべきだということでしょう．自分の目の前にいる人間がある種の〔性的な〕欲求をもっているということ，そして，こういう仕方でお互いに楽しんだり，コミュニケーションしたり，愛したりすることは，もっとも深い人間的な欲求だということを，です．そして，自分自身が快感を得ることが大切なのと同じくらい，少なくとも同じくらい，他人に喜びや快感を与えることも大切だということ，これを理解することが本当に重要だと思います．（M06）

この事例では，双方の性的快感に焦点が当てられている．回答者（インフォマート）である彼のみでなく，彼のパートナーも快感を感じて欲しいというのだ．彼はインタビューにおいてこの話をするとき，コミュニケーションという言葉にも言及する．性的快感とは，ひとつの感情であり，それはお互い出会って関係がはじまった当初は強く，刺激もあり，気持ちのよいものであるが，関係が長く続くにつれて次第に弱まっていくものである．だからこそ，回答者（インフォマート）たちはコミュニケーションの重要性につい

て語る．十分にコミュニケーションをとることで，彼らは性的快感を持続させようとするのだ．〔そのためには〕上述したように，お互いに相手のセクシャリティについて知り理解する〔というコミュニケーションが〕必要となる．パートナーとの関係が長い回答者（インフォマート）たちが，しばしば語るところでは，セックスの頻度は以前より少なくなったが，お互いに長く一緒にいる分，それだけいっそうお互いのセクシュアリティが以前よりも親密（インティメート）で深いものに感じられるという．

⑵（カップルとして／個人としての）儀式（リチュアル）としてのセクシュアリティ

ドイツ語圏のカップル関係を特徴づける，もうひとつのアスペクトは，カップルのセクシュアリティの儀式（リチュアル）化である．（キスやハグのような身体的触れ合いからセックスまで，さまざまなかたちで）定期的にセクシュアリティを実践することで，カップルは自分たちの関係が上手くいっていることを情緒的に確信する．もし，長期間にわたってこうした性生活が無いのであれば，それは，たいていの場合，カップル関係において不満があることを意味する．

⑶（個人としての）承認の徴表（しるし）としてのセクシュアリティ

ドイツ語圏のカップル関係を特徴づける３つのアスペクトのうち，最後の機能は承認の徴表（しるし）としてのセクシュアリティであり，それは⑴と⑵の点と密接に関連している．この機能によって，パートナーは互いに相手から魅力的に思われていることを情緒的に確信する．「お互いに気があること（Lust-auf-einander-haben）」とは，たんに性的な欲求や快感（sexuelle Lust）のみを意味するわけではなく，それは愛と承認の象徴でもある．それは，「私はあなたを妻／夫として知覚している（wahrnehmen）」，「私はあなたをパートナーとして受け入れている（annehmen）」ことの徴表（しるし）なのである．

以上に述べた３つのポイントは，どれも〔ドイツ語圏のパートナー関係において〕お互いのセクシュアリティを体験し維持するための重要な要素（ファクター）となっている．これらの要素のどれかひとつでも体験できない場合には，パートナーとの関係に不満を感じることだろう．著者のインタビューにおいても，〔ドイツ語圏の〕被験者の多くが，お互いのセクシュアリティを体験しなくなることは恐ろしいことだと語っている．

> 私にとってそれは恐ろしいことですよ．つまりね，私はなんとなく思うんですが，たぶんそれは迷信かもしれないけど，だけど，ときどきセックスをすれば，結婚生活もリフレッシュされると思うんです．まったくセックスなしには，〔どうなるのか〕私には分かりません．とにかく私が思うに，私たちはセックスのなかで，パートナーを，もう一度新たに発見するんです．パートナーを感じること．パートナーを感じる，だから結婚生活において，ときどきセックスをすることは悪いことではないんじゃないかな．もちろん，毎日する必要はないでしょうけど．

したがって，パートナーとのセックスレスな関係は，ドイツ語圏では信じられないことだと思われている．著者がドイツ語圏の男女にインタビューしたさい，日本のセックスレスな関係について言及すると，彼らはたいてい次のように答える．「本当にそんなのあるんですか．それって〔そもそも〕カップル関係なんですか．」しかしカップル関係におけるセクシュアリティが，ドイツ語圏においてどのように定義されているかを理解するならば，なぜ西洋社会が，日本のセックスレス現象にこれほど驚いて反応するのかも理解できるだろう．

エヴァ・イルーズが『なぜ愛は終わるのか』において説明するところでは，「セックスをしないこと」は，別れにつながるような，深刻な関係の変化の徴表（しるし）であり理由であるという．セクシュアリティは，人々が親密性や別れを語るときの，その語り（ナラティヴ）に大きな影響を与えているようである．イ

ルーズによれば，「パートナーとの良好なセクシュアリティは，良好な情緒的結びつきを反映しており，反対に，良好でないセクシュアリティは，情緒的結びつきが弱まっていることの徴表（しるし）と考えられる．人間はみずからのセクシュアリティと性的欲求が実在することによって，パートナーとの関係や感情が実在することを理解している」（Ilouz 2018: 292）という．

5.2 婚外関係

さて，本稿の最後に，婚外関係・不倫についても，ドイツ語圏ではどのように捉えられているのかを考えてみたい．セクシュアリティは失業，アルコール中毒，経済的困窮と並んで，離婚の大きな原因となっている．たとえば，性的な不貞行為（Untreue）やパートナーと寝室を共にしないことが離婚の原因となりうる．ドイツ語圏（とりわけ西側）において，性的および情緒的な誠実さ（Treue）は非常に重要視されているので，不倫は婚姻関係やパートナー関係の終わりを意味する．もちろん，上述したセクシュアリティの3つの重要な機能が，パートナー関係において維持されない場合には，婚外関係が始まるかもしれない．

しかしながら，いつ，そしてなぜ不倫するのかという不倫の時点〔や理由〕が重要である．それは，パートナー関係が始まったばかりの頃なのか，それとも，もっと時間がたってからのことなのか．不倫は，たいていパートナー関係におけるある種の欠如を表している．現代の若者たちのパートナー関係においては，もし一方のパートナーが不倫をすると，少し経ってからそれを他方に打ち明けるので，パートナーとの関係と並行して，婚外関係が長く続くことはない．

たいていの場合は，上述したように，それはパートナーとの関係の破局につながり，そして不倫相手との新たなカップル関係が始まる．もうひとつの可能性は，一夫一婦制を前提としたこれまでの〔閉じた〕関係が，不倫によって開かれた（オープンな）関係に変化するというものである．これは現代の〔セクシュアルな〕関係モデルのひとつであり，若者たちがこの関係を試してみることがますます増えている．〔本稿の最後に，こうした新たな関係モデルを2つ挙げてみよう．〕

現代的な関係モデル

- 開かれた（オープンな）関係・開かれた（オープンな）パートナーシップ：これは，お互いが別のパートナー，とりわけセックス・パートナーをもつ自由があるような恋愛生活の形態である．この関係モデルにおいてもっとも重要なことは，パートナーの双方がこのモデルを望んでおり，また誠実であることだ．たとえパートナー以外の人と出会い，性的な関係をもったとしても，それについてパートナーとオープンに話し，隠し事をしないのである．

- ポリアモリー：これは，複数のパートナーと情緒的かつ・あるいは性的な関係をもつような恋愛生活の形態である．「開かれた（オープンな）関係」とは異なり，このモデルでは複数のパートナーを同時に愛することができ，それぞれのパートナーと恋愛関係が育まれる．このモデルにおいても，信頼（Vertrauen）が重要であり，〔この関係において起こったことは〕この関係に参加するすべてのパートナーに打ち明けられる．

以上の本稿の論考は，残念ながら，日本とドイツ語圏におけるカップル関係の流行（トレンド）と特徴を簡単に概観するにとどまる．しかし，本稿が日本とドイツ語圏という2つの社会におけるセクシュアリティの差異を上手く再構成できたらならば，著者としては幸いである．〔本稿によって最終的に示されるのは，〕たったひとつのセクシュアリティが存在するわけではないということである．どのようにセクシュアリティが構築され，定義され，知覚されるのか，それは世代や文化や社会に依存して決まるのである．

注

1）（訳注）パートナー関係とは，婚姻の有無にかかわらず，固定された愛情関係を意味する．したがって夫婦関係も含意される．本文では，のちに「カップル関係」とも言い換えられるが，同義である．

2）（訳注）ドイツ語原文では，「セックスレス sexless」という和製英語を説明するために sexuelle Inaktivität という言葉が用いられているが，どちらも以降は「セックスレス」と訳す．

3）（訳注）ドイツ語原文では「不倫」という言葉に関しては，ドイツ語の Fremdgehen と日本語の furin の両方が使用されているが，どちらも「不倫」と訳す．

4）（訳注）訳注 2 を参照．

5）（訳注）パートナー関係と同義．日本語の「カップル」という言葉には，婚姻関係を含まないようなニュアンスもあるが，本文では婚姻関係（夫婦関係）も含む意味で使用されている．

参 考 文 献

阿部輝夫．1991.「セックスレス・カップルと回避型人格障害」『日本性科学会』8（2），14.

阿部輝夫．2004.『セックスレスの精神医学』筑摩書房，18-19.

朝日新聞「女子組」取材班．2018.『大人の保健室 セックスと格闘する女たち』集英社.

有川ひろみ．2004.『不倫の恋も恋は恋』幻冬舎.

荒木乳根子．2014.「配偶者間のセックスレス化―2012 年調査で際立った特徴―」『日本性科学会雑誌』32，7-21.

平山満紀．2019. Developments in Information Technology and the Sexual Depression of Japanese Youth since 2000, International Journal of the Sociology of Leisure, 95-119; https://link.springer.com/article/10.1007/s41978-019-00034-2（2020 年 9 月 8 日）.

Ilouz, Eva. 2018. Warum Liebe endet. Suhrkamp Verlag Berlin, 277-292.

亀山早苗．2003.『「妻とはできない」こと』WAVE 文庫.

―――．2006.『不倫の恋で苦しむ男たち』新潮文庫.

―――．2010.『「夫とはできない」こと』WAVE 文庫.

―――．2010.『女の残り時間―ときめきは突然，やってくる』中公文庫.

―――．2012,『セックスレス―その時女は』中央公論新社.

―――．2013.『恋が終わって家庭に帰るとき』WAVE 出版.

こだま．2017.『夫のちんぽが入らない』扶桑社.

Lewandowski, Sven. 2008. *Diesseits des Lustprinzips – über den Wandel des Sexuellen in der modernen Gesellschaft*. In: SWS- Rundschau 48, 3, 242-263.

Mio. 2019.『夫の H がイヤだった』亜紀書房.

Moriki, Yoshie. 2017. Physical intimacy and happiness in Japan: Sexless marriages and parent-child co-sleeping in Wolfram Manzenreiter, Barbara Holthus（eds）*Happiness and the good life in Japan*. 41-52, New York: Routledge.

日本家族計画協会．2017.「夫婦半数がセックスレス 割合最高 家族計画協会調査」https://mainichi.jp/articles/20170211/ddm/012/040/109000c（2020 年 9 月 9 日）

日本性科学会・日本セクシャリティ研究会．2014.「2012 年・中高年セクシャリティ調査特集号」『日本性科学会雑誌』32.

Pacher, Alice. 2018. Sexlessness Among Contemporary Japanese Couples, In: Beniwal A., Jain R., Spracklen K.（eds）*Global Leisure and the Struggle for a Better World. Leisure Studies in a Global Era*. Palgrave Macmillan, Cham.

パッハー　アリス．2017.「現代日本の不倫の分析：ライフイベント，セックスの意味，アイデンティティー」『文学研究論集（明治大学大学院）』（48），233-253.

社会実情データ図録「配偶者のセックスレスの割合」https://honkawa2.sakura.ne.jp/2265.html（2020 年 9 月 9 日）

高橋幸．2019.『「草食化」以降の異性友人関係―「添い寝フレンド（ソフレ）」経験者へのインタビュー調査から―』武蔵社会学論集『ソシオロジスト』21，武蔵大学社会学部，77-99.